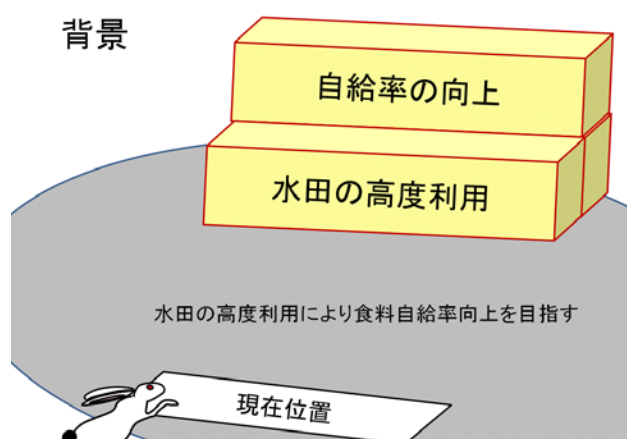


## シンポジウムの進め方

皆さん、こんにちは。今日のシンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。ここからの進行を務めさせていただきます、作物研究所の川口健太郎と申します。力不足ではありますが、よろしくご協力をお願いいたします。ここからは極力、自由な雰囲気で行いたいと考えております。

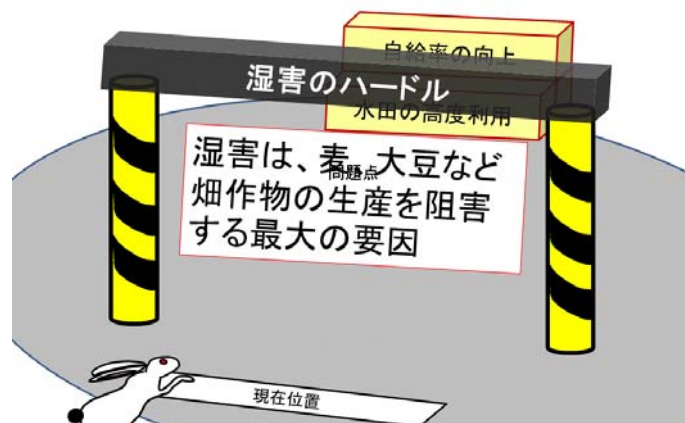
まずシンポジウムを企画した背景をご紹介します。水田の高度利用によって食料自給率の向上を目指すという、ここが大きな背景になっていると思います。来年の干支の「うさぎ」を私たちに見立て、自給率向上に向けて階段を上ろうとしている図です（図0-1）。そこに湿害のハードルが立ちふさがっています。湿害は麦、大豆など畑作物の生



(図0-1) シンポジウムの背景

産を阻害する最大の要因となっており、これが問題になっています（図0-2）。このハードルを乗り越えていくために、どのような方法があり、何をすることが必要なのか？ということ、6名の講師からの話題提供により、皆さんと一緒に考えたいと思います。

## 問題点



(図0-2) 問題点

さて、次にプログラムの構成をご説明します。まず第1部では、湿害という現象をしっかり理解することから始めましょうということで、作物研究所の小柳さんに「湿害の現実とは何か？ー水田作小麦を中心としてー」というタイトルでお話をいただきます。次に、現実にある湿害に対して立てられる対策技術についての話題を、地域的な先進例の一つとして、福岡県農林水産部の田中さんに「福岡県における麦類および大豆の湿害対策技術」というタイトルで講演をいただきます。3人目は中央農業総合研究センターの加藤さんをお願いしています。今まで湿害と申しますと水の過剰、酸素不足ということがよく語られてきましたが、この講演では、「湿害に起因する大豆病害発生メカニズム」というタイトルで、湿害と病害との関わりについての新しい情報を提供いただきます。

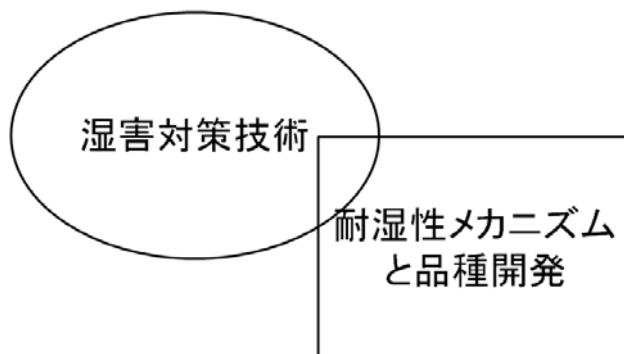
第1部が終わりましたら30分ほど休憩を取りますが、その時間を利用してポスターセッションを行います。総合討論でもポスター発表の内容を話題として取り上げるつもりでありますので、ぜひすべてご覧いただきたいと思っております。ポスターの発表者は「ポスター発表者」という名札をつけておりますのでわかりやすくなっております。ぜひ活発な議論をお願いいたします。

次は、第2部です。第1部はどちらかというと環境側、ハードル側のお話でした。第2部の話題はハードルを乗り越えるべき作物側のお話になります。また、農業生産現場というより基礎研究の現場の話題になります。第2部のトップバッターは作物研究所の島村さんです。「大豆の耐湿性における二次通気組織の役割と機能」というタイトルで、大豆が耐湿性を発揮する上で通気組織が重要であるというお話をされます。次に畜産草地研究所の間野さんには、耐湿性育種という観点では最も進んでいると思われるご研究の内容を「トウモロコシ属における耐湿性の遺伝解析と耐湿性畑作物の作出」というタイトルでお話をいただきます。講演の最後は、名古屋大学の中園さんに、「植物の耐湿性メカニズム研究の到達点」というタイトルで、植物が持つ耐湿性メカニズムに関する研究がどういうところまで進んでいるかという研究の最前線のお話をいただきます。冒頭の小柳さんから、最後の中園さんまで、圃場生態系から分子レベルの話まで通じるということになっております。

最後に総合討議の時間を設けます。個別の質問はぜひ個別の講演の中で行っていただくこととして、総合討議では、さらにその上での相乗効果を期待いたします。今日は、現場での湿害対策技術にかかわる方々と、研究現場で耐湿性メカニズム研究や品種開発を行っている方々が、一同に集まっていただきました。これはたいへん貴重な機会ですので、お互いに議論していただくことによって畑作物の湿害の問題、湿害克服に向けての方策などが議論できればと考えております(図0-3)。

### 総合討議

- 湿害の克服に向けて、現状を理解し、
- 将来を展望する。



(図0-3) 総合討議の進め方

最後に、講演の進め方の説明をいたします。一講演は20分ということをお願いしてあります。その後の意見交換と議論は10分です。ポスター発表は30分です。注意点といたしまして、写真撮影等をご遠慮願いたいと思います。また、携帯電話はマナーモードをお願いします。一方で今日の会合の結果をプロシーディングとしてまとめる予定のため、会場内の音声を録音させていただいております。ご了解をいただければと思います。